

隔絶すれども棄絶せず——会沢正志斎の対外認識をめぐって

東京大学大学院 廖嘉祈

江戸後期の水戸学派の重鎮である会沢正志斎（1781～1863）は、その代表作とされる『新論』において、苛烈な攘夷論を展開した人物として知られている。しかし、その最晩年に至り、正志斎は開国論を唱えるようになる。これに対し、当時から変節とする批判がある一方で、明治期以降にはその背後に一貫した思想が存在すると見る見解も提示されてきた。

上記の問題に対して一定の理解を与えるべく、本発表では、正志斎の対外認識にまつわる諸言説を分析した上、豊かな下位分類を有する中国の攘夷論との関係性や、その水戸学派における位置づけを明らかにする。

正志斎は、世界各国の「君師」がそれぞれの風土に応じた教化を施している以上、互いの教化のあり方を押し付けるべきではないと考え、相互の隔絶を理想とした。一方で、正志斎は『漢書』や『大学衍義補』に見られるような、夷狄への教化の可能性を断念し、双方の断絶を目指す攘夷論にも接していたが、それらを受容することはなかった。その理由は複合的であると考えられる。第一に、西洋との隔絶は理想ではあっても、当時の日本が直面していた状況は従来中国の先例にはない深刻なものであり、機械的な応用は不可能だと判断したためと考えられる。第二に、正志斎は単に日本が西洋の侵入を免れることのみならず、世界規模での人倫の維持を望んでいた。そのため、自国以外を放置するような夷狄への「棄絶」は、もとより選択肢になり得なかったのである。

もっとも、尚武の重要性を強調する正志斎は「夏を以て夷を化す」ことを目指すに際し、積極的な対外進出を唱えていたわけではない。水戸徳川家当主の徳川斉昭や、同じく水戸学派に連なる藤田東湖、吉成南園らとの比較を通じ、正志斎の対外姿勢の穏健さが浮き彫りになる。本発表では、水戸学派を攘夷論の牙城として一概に把握するのではなく、その内部における立場の相違に着目することの重要性を提示したい。